

北の海の道リイシリのアイヌ史

8月28日(火) 18:30~20:00 札幌会場

9月5日(水) 19:00~20:30 東京会場

講師 西谷 榮治 利尻町立博物館学芸課長

こんばんは。西谷と申します。紹介にありましたように私は利尻島生まれです。利尻高校を卒業して東京の大学へ進んだのですが、そこで初めて利尻島には日本史と違う歴史がある、中学、高校の歴史の授業で習った歴史とは全く違う歴史を持っているということを知りました。

大学の東洋史の先生は同じ北海道出身だったのですが、その先生に利尻島には縄文時代はあるけれど弥生時代は無いとか、古墳時代、奈良、平安、鎌倉も無いということを言われました。しかし、私は、高校までの授業で、そのことを習うことはなかったので全く知らなかったのです。

その時、はじめて北海道にどういう歴史があるのかということを学ばなければならなくなったという必然性が出てきて、そこから私は利尻島史にはまってしまったのです。そうした中で利尻島史を調べていくと、非常に面白いことがたくさん出てきました。

利尻島には、1万3000年前から人が住んでいたという足跡が残っているのです。ここに住んでいたと特定されている場所も1ヶ所あります。その人たちは地球が温暖化する中でシベリア大陸から南下してきた人たちです。

あとは、縄文時代になると、今度は松前半島、渡島半島の方から北上してくる人たちの動き、また、オホーツク文化、だいたい5世紀から10世紀ぐらいですが、この頃には、サハリンから南下してくる人たちが多くなるということがあります。

そして、近世になると、場所請負制という中で、利尻場所での漁獲物の動きが出てくるのです。それ以上に面白い歴史というのは、今日はあまり詳しく話すことはできないのですが、1848年にラナルド・マクドナルドというアメリカ人が利尻島に渡ってきていることです。マクドナルドはアメリカの捕鯨船に乗って日本の近海までやって来て、捕鯨漁が終わった後、鎖国の日本へ入り込んだのです。

なぜ、このマクドナルドという人が鎖国の日本に来たのかということですが、1845年にアメリカの捕鯨船が日本の漂流船に乗っていた人を助けて日本に連れ来たのですが、その時の幕府の対応がスムーズではなかったのです。そのことが、アメリカの捕鯨船がハワイに戻ってから『海員の友』という新聞に書かれたのです。これだけ世界がいろいろ動き回っている中で、日本というのはどういう国かということ、マクドナルドがこの新聞記事を読んでいるということが分ります。そうしてみると、利尻島史に絡む部分でマクドナルドが渡ってきたということが

らアメリカの捕鯨漁の歴史や幕末の日本の課題も見えてくるのです。というのは、マクドナルドは利尻島に上陸した後、宗谷、松前を経て長崎に連れていかれ、そこで半年いたのですが、その時に日本人のオランダ通詞がマクドナルドから英語を習っているのです。この時に英語を習った人たちの中から、ペリーが来航した時に通訳をする人が出ているのです。

こうしたことのほか、1848年の40年前、1808年には会津藩士250人が利尻島の警固のために来ています。これはロシア対策のためです。ロシアは幕府に対し何らかの形で交易を求めてきていたのですが、幕府は鎖国を理由に一切応じなかったのです。そうするとロシアは武力行為に出てきて、千島とか樺太、宗谷、利尻を襲撃してきたのです。そのため、幕府は北を守らなければならないということから、東北の諸藩に警備を命じたのです。それで利尻島に来たのが会津藩士なのです。

来年は会津藩士が利尻島に来てから200年を迎えることとなります。そのため、現在、会津若松市と連携をとりながら200年をどう迎えるかということで動いています。利尻島には会津藩士8人の墓が3ヶ所に残っています。そうした、幕末にロシア対策として幕府が動いたという世界史にも絡む部分や、明治維新後に本州各地からいろいろな人たちが来ていますが、そこから日本史が見えてくるというようなことから、利尻島は非常に面白い歴史を持っている島だと言えます。

今日のテーマにもなりますが、そうした面白い歴史の中からアイヌの人たちに関わる歴史、これをいろいろな形で見ていきたいと思えます。

中世の蝦夷地の歴史は空白の部分と言われていて、その中でももちろん利尻について書かれている歴史は全くありません。しかし、いろいろ書かれているものの中から利尻について探れるものがあるかどうか調べてみました。

近世に入ると、蝦夷地全体がいわゆる場所請負制度が展開され、その中において利尻島がどう関わってきたのか、また、利尻島についてどのように書かれているのかということを探ってみたいと思えます。

それから、アイヌの伝説、利尻島についてのアイヌの伝説を調べてみました。利尻島に文献は残っていないのですが、近世に書かれたいろいろな文献を見ていくと、利尻島は川を流れ下ってそれから海を北上して今のところに着いたとか、天塩とか稚内の沼から抜け出て利尻島ができたというような、いろいろな伝説が残っているの

で、それをいろいろな形で見ていきたいと思います。

空白の中世の歴史についてです。稚内市史の第2巻、最新の号ですが、ここに「北方における緊張によって、アイヌ民族が大きく変わろうとしていた時期は、和人が渡島半島南部に定住する時期と重なっており、両者の間の活発な交易活動が予想されるのであるが、中世のアイヌ民族を知るための文献も、遺物も、遺跡も皆無に近く、「空白の中世」といわれているように、ベールに包まれたままである。」と書かれています。

確かに、北海道全体でこのような動きはあるのですが、そのことについての具体的な文献の記録、もちろん利尻島においてもまとまった記録がないので、全く分らないのです。具体的な文献の記録はないのですが、函館、松前のあたり、あと小樽の近くにある余市のあたりで、素焼きとか青磁、白磁というような中国製の陶磁器が出土したり、瀬戸、美濃の陶器、それから多量の古銭が渡島半島全体で出土しています。このことから、やはり何らかの形で物の動き、物だけではなく人も動いているという可能性があるということが分ります。

中世のわずかな記録の中に『蝦夷人の島』という記録があります。これはキリスト教・イエズス会の神父であるイグナシオ・モレイラという人が書いたものです。天正18(1590)年に松前慶広が京都に行って豊臣秀吉に拝謁した時に、松前慶広は北海道のアイヌの人を連れていったようだということが分かっているのですが、この時に京都でモレイラがアイヌの人たちから聞き取ったことを書いているのです。

その記録の中に「この場所に接している島の部分は、これを日本人が蝦夷といい、土着のものが「アイノモンリ」と称している。その住民の話では、かれらはまた西方にある他の島々ばかりでなく、蝦夷から見て北方に延びているある島にもしばしば行くそうである。この島は「レブンクル」と呼ばれているが、高麗とつらなっているとその住民がいつている。」と書かれています。そして、アイヌの人たちの具体的な姿について「粗野であり開化していない。しかし体格は強壯である、非常に力が強い。身には獣皮をまとい、日本人より短い弓をもち刀を頸に掛けているし、また他の多くのことでも日本人よりむしろ韃靼人をまねている。」と書かれています。このようなことが書いているのですが、これをどのように見るかということです。

西方にある他の島々ということについて、蝦夷の島において西方にある他の島々というのを利尻、礼文と見るのか、北海道全体の西側にある島として、渡島半島の方の奥尻島と見るのか、北海道の中間あたりの天売島、焼尻島と見るのか、その北になると利尻島、礼文島ということになるのですが、これをどう見るのかということがあります。

ここでもう一つ、蝦夷から見た北方に延びているある島「レブンクル」、レブンとは沖という意味ですが、これ

は旧樺太、現在のサハリンを示す可能性が非常に高いのではないかということが言えると思います。「蝦夷から見た北方に延びてある島」が樺太、サハリンだとしたら、その同じ文章の中にある「西方にある他の島々」というのは、利尻島、礼文島を示す可能性が非常に高いのではないかなということが言えると思います。

これはあくまでも私の推測です。皆さんも、この文章を読んで、その「西方にある他の島々」をどうとるか、また、「蝦夷から見て北方に延びているある島」をどうとるかというところを皆さんも考えていただければと思っています。

記録として中世の情報をまとめても、そんなにたくさん文献がないのですが、モレイラの書いた『蝦夷人の島』の中で具体的に迫ることができる記述があるということは、やはり北の海の道という、北海道の西海岸から北方に延びている島がサハリンだとすると、宗谷海峡をかなりの人が行き来していたと言えると思います。

サハリンと宗谷、あるいは、西にある島々が利尻、礼文だとしたら、宗谷海峡をかなりのアイヌの人たち、物や人の動きがあった、行き来していたと言えると思います。そうすると、やはりそこに利尻が関わってくることも当然あると思います。逆に、これは京都で聞き取られたものですが、松前の情報というのがかなり出回っていたという可能性もあります。

中世は、不透明な空白の時代ですが、利尻、礼文、あるいは宗谷、樺太などの人たちは密接に行き来していた、何らかの形で関係性があったと言えるということだけは確かではないかと思っています。

これらは歴史上、例えば、津軽海峡を挟んだ北海道と本州との関係でも、決して津軽海峡が北海道と本州とを隔てる壁にはなっていないということです。この海峡を挟む内海線を中心に、北は東北、樺太、沿海州方面までアイヌの進出があり、南は若狭、さらに九州、瀬戸内海方面まで物資の輸送が行われていたのです。中世の海の壮大なスケールのネットワークの存在には驚かされるばかりであるということを、法政大学の小口先生がまとめています。その詳細は『アイヌの歴史と文化』に書かれています。これはもともと東北電力の『白い国の詩』に連載されていたものですが、最近になって『アイヌの歴史と文化』という本にまとめられて売られています。写真も大きく出ていて、非常に分かりやすくまとまった本です。

いずれにしても、小口先生が言うように、中世の歴史の中で、津軽海峡から日本海の北の道へと続く大きなネットワークが作られていたとするなら、津軽海峡だけではなく、宗谷海峡もそのネットワークを形作る上で、大きく位置づけられるのではないかということが言えます。だとしたら、そこに宗谷アイヌ、もちろん、利尻、礼文のアイヌの人たちも深く関わっていたのではないかなと

ということが想像されます。

近世になると、商場知行制、場所請負制ということが文献に出てきます。その中から近世のリイシリのアイヌ史について見ていきたいと思えます。

商場知行制というのは、いわゆる蝦夷地に和人が出向いて行って、そこで地元アイヌの人たちと交易をすることですが、そのもう一つ前の段階で城下交易というものがありました。城下交易というのは、北海道各地のアイヌの人たちが松前に行って和人と交易をするというものです。この時、アイヌの人たちは主体的に動いて松前で交易をしていたのです。

その城下交易のことを記録したものに、1618年10月1日の「アンジェリスの第一蝦夷報告」という報告があります。これは『北方探検記』の一部分になるのですが、そこには「毎年東部の方にあるミナシの国から松前へ百隻の船が、乾燥した鮭とエスパーニャのアレンカに当たる鯧という魚を積んでいきます。」と書かれています。利尻島に関する記述としては「蝦夷の国の西の方に向かう一部である天塩国からも松前へ蝦夷人の船がまいります。それらの船は種々の物と共に中国品のようなドンキの幾反をも将来します。」とあり、「それらの蝦夷は高麗から余り遠くないようございます。」とあります。ここでなぜ天塩というのが出てくるのかということ。中国品のドンキとは、いわゆる蝦夷錦、山丹錦と呼ばれる衣装です。これは中国から樺太を経由して入ってくるのですが、それを天塩の国のアイヌの人が持ってくると書かれています。ここで、果たして蝦夷錦、山丹錦の交易に関わったのが天塩の国の人たちだけだったのかという疑問があります。

私たちは、そうではないと思っています。蝦夷錦、山丹錦が中国から大陸、サハリンを経由して北海道に渡ってくるとしたら、そこには、当然、宗谷のアイヌの人たち、あるいは利尻のアイヌの人たちも関わっていたはずだという予測が出てくるのです。そのため、天塩の国という中には、宗谷のアイヌ、利尻のアイヌの人たちがいたという可能性を考えてもいいのではないかと提案を私たちはしているのです。

このことについてもっと具体的に書かれた記録があります。元和年間（1615年から1624年）に4度にわたって松前に潜入したイエズス会の宣教師ジェロニモ・デ・アンジェリスとディオゴ・カルワーリュの報告書から、松前城下交易を知ることができます。日本海側では天塩まで、太平洋側ではメナシ（根室付近）までの各地のアイヌの人たちが松前に集まってきて交易をしているということです。

さらに、天塩アイヌについて、70日あまりを費やして持ってくる、藩主に献上されるのは中国製絹織物、いわゆる蝦夷錦、山丹錦だということも書かれています。この中国製絹織物が、樺太から宗谷海峡を越えて、天塩アイヌの手に渡ったとするなら、この流通に宗谷アイヌ、

利尻アイヌも深く関わっていたのではないかとということが言えます。宗谷アイヌ、利尻アイヌとは文献の中に出てきませんが、物の動きを見ていくと、そこに利尻アイヌ、礼文アイヌあるいは宗谷アイヌの人たちが関わっていたということは間違いないのではないかと思います。

次に商場知行制です。徳川三代将軍の時代に幕府は鎖国体制の確立を図りました、そしてそれは北海道の中でも展開されました。そうした中での商場知行制では、それまでアイヌの人たちが松前城下に集まってきていたのですが、今度は逆に松前にいる和人の方が北海道各地へ動いていくという状況が生まれてきました。これが城下交易から商場知行制への移行ということですが、利尻、宗谷の商場がいつごろから展開されてきたのかということは、記録の中からはなかなか見えてこないところです。

今のところ分かっているのは、寛永11（1634）年に松前景広が留萌、天塩の商場をあてがわれたということです。これだけですが、この時代の前後には北海道北部の地域で商場が展開されていたのではないかと思います。

この頃に描かれた地図に「リイシリエソ」と書かれたものがあります。その地図は、正保元（1644）年に松前藩が幕府に呈上した絵図に基づいて描かれた「正保国絵図」なのですが、その中に「リイシリエソ」「レフンシリエソ」と書かれています。このように書かれたということは、この頃には北海道のどの辺に利尻島、礼文島があるのかという地理的な位置づけを松前藩でも押さえ始めていたということが分かります。

この地図は、例えば現在の国土地理院の地図のように正確なものではなくて、例えば利尻島は北海道のどの辺にあるのかというくらいのもので、このような地図ができたということは、城下交易のために利尻、礼文、宗谷のアイヌの人たちが松前の城下に来て交易するのではなく、商場知行制の下、逆に松前藩の和人が利尻、礼文にまで来て交易をするほか、いろいろな情報を仕入れていたからではないかと考えられるのです。この地図ができたのは1667年ですから、この時において商場知行制は北海道全域で展開されていたという要素として考えられるのではないかと考えています。

このような商場の具体的な記録は、1669年のシャクシャインの戦いに際しての記録の中にあります。それは、津軽藩が寛文9（1669）年に藩兵を松前城下に派遣し、翌10（1670）年には隠密船を東西蝦夷地に潜入させた時の記録で『津軽一統志』として残っています。これを読むと、いろいろな形で詳細な記録が出てきます。利尻島に関するものでは、松前殿御船頭忠兵衛と申す者が6月28日に「るいしん」、利尻島へ来た、そこに「いそや」の「狄」五、六十人が来て船頭忠兵衛を殺そうとしたが、利尻のアイヌの人たちが「いそや」のアイヌの人たちを防いで船頭忠兵衛を守った。そして船頭忠兵衛は松前に帰ったということが書かれています。もう一つ、松前の3艘の船のうち1艘は家中の船で「そや」「ゆうへつ」

「てしを」に交易のために来るということも書かれています。

この時、利尻のアイヌの人たちはなぜ「いそや」のアイヌの人たちから船頭を守ったのかということですが、これは殺してしまうと交易が成り立たなくなるからです。ここで殺してしまうのではなく守ることによって、自分たちの交易を成り立たせる必要性を利尻のアイヌの人たちが感じていたということがこの文章から分かります。こうした状況にあったということは、1669年、1670年の記録に残されるより前から、かなり密度のある交易が松前と利尻のアイヌの人たちとの間で行われていたということが推測できます。

寛文10年6月28日に松前藩船の船頭忠兵衛が、交易のために「るいしん」に来たところ、「いそや」のアイヌの人たちが追いかけてきた和人と戦うように働きかけたけれども、「そうや」「ゆうへつ」「てしを」のアイヌたちは立ち上がらなかった、そして、利尻島のアイヌの人たちはこれを防いで忠兵衛を助けた、その忠兵衛は「いそや」のアイヌの人たちに償い金30両を支払って、8月4日に無事松前に帰ったということがこの『津軽一統志』の中から言えることです。

てしを商場は寛永11年に作られていることが分かっているのですが、「そうや」「ゆうへつ」「てしを」の3カ所に派遣された商船のうち、2艘が藩主の商船で、1艘が家臣の商船であったと考え、「そうや」「ゆうへつ」は藩主の直轄であったために記録が残っていないということが考えられます。誰かに場所をあてがったために記録したのであって、松前藩が直営していた場合には記録に残らなかったということが考えられるのです。

また、『津軽一統志』には、「るいしん」の位置づけとして、「糸さしの鼻、沖にるいしんという島有」、「糸さし」とは道南の江差のことで、鼻とは沖の方ということだと思います。そして「蝦夷の家、蝦夷商場があって、300人ほどの蝦夷がいて、大將はムネワカイン、モンヤカインという名前である」ということも書かれています。

それからもう一つ、「6月25日に與市の大將3人、そうやの大將1人、るいしんの大將1人、おとな分の者5人合わせて御船参り候は、松前殿より通路の者に5月に来ている」ということも書いてあります。この記述から、そうやのアイヌの人たち、るいしんのアイヌの人たちが余市まで行って、いわゆる和人とアイヌの人たちの戦いの様子がどうだったのかということ探っていたということ分かります。

北海道北部のアイヌの人たちにとってみると、アイヌの人たちと松前とが和睦しなければ、自分たちの交易も成り立たなくなるということから様子をうかがっていた、あるいは、何とか和睦に結びつけるような動きをしたのではないかということが、この記録の中から見えてきます。

この部分をまとめてみると、るいしんには蝦夷、アイ

ヌの人たちが300人ほど住んでいて、大將はムネワカイン、モンヤカインという者で、「るいしん」は「商場」、交易所で、「商場」は「れふしり(礼文島)・「てしほ(天塩)・「はつかいへ(抜海)・「そうや(宗谷)」にもあったということが『津軽一統志』の記録の中から見えてきます。そして、6月21日に利尻のアイヌの首長が宗谷のアイヌの首長とともに、余市のアイヌと松前藩との和睦交渉を見守るため余市へ赴いていることがわかります。また、1669年のいわゆるシャクシャインの戦いにおいて、宗谷、利尻、礼文、北海道北部のアイヌの人たちにとって、何とか和睦して正常に松前の船が動いてくれるようにならないと我々は困るのだということを申し出ているということが分かります。

こうしたことから、この1669年、1670年よりも前からかなり密接な、実りある交易が行われていたということがまず一つ言えます。それから、その交易がないと自分たちも困るということがあるわけです。交易がなければ困るような生活というのが、どのように作られたのかということは、これから想像しなければならないのですが、交易がないとなぜ困るのかということを考えなければならないと思っています。

こういう形での商場の展開について、おもしろいというか、興味、関心がある記録に「與市の大將4人、天塩の大將が1人、るいしんの大將2人、そうやの大將2人、合計9人が、與市へ10日前に寄り合わせた、大將9人の衣装の名は分からないが、北高麗織の色々唐草織りつけのような服を着ていた、その衣類の見事なること、」というようなことが書かれています。この時集まった大將たちが着ていたのは、いわゆる蝦夷錦、山丹錦であったと考えられます。利尻の大將も山丹錦を着ていたということは、やはり宗谷海峡を挟んで樺太、サハリンとそうやのアイヌの人たち、あるいは北海道のアイヌの人たちの交易の中で役割を持っていたということが言えると思います。アイヌの人たちの長の人たち、地域を統括する、治める人たちは山丹錦を着て、その地域における役割だけではなく、交易においても何らかの役目を持っていたのだと考えられます。

こうしたことから、宗谷海峡を挟んだ交易ネットワークの大きさ、スケールの大きさというものが見えてくるのではないかと思います。まとめてみると、シャクシャインの戦い終結後の様子を探るために津軽藩の隠密船が西蝦夷地に潜入して来た。そして、津軽藩の人たちと宗谷・利尻・天塩・余市の長人たちが忍路の潤で接触した、忍路とは小樽の近くです。その時、北高麗織の衣装をまとっている9人の長人とは、いわゆる武装したウタレを率いる村落共同体の長であり、まとっている、着ている北高麗織とは、黒竜江から間宮海峡、樺太を経て、宗谷に渡って来た中国製の絹織物、いわゆる蝦夷錦、山丹錦であるということが分かります。こういうものをキーワードにして、いろいろな記録、文献を見ていくと、この

頃には既に密接な交易が成り立っていたということが言えます。

次は、場所請負制への展開です。ある意味でシャクシャインの戦いの後、宗谷、天塩、あるいは、るいしんのアイヌの人たちは逆に和人とアイヌの人たちに何とか和睦することを願っているのです。自分たちにとっては、何らかの形で交易が成り立たなくなると非常に困るということを言っているということになると思うのですが、そういった中で、今度は場所請負制への展開ということがあります。

場所請負制とは、その場所での交易や漁業の経営を商人に請け負わせるということで、この商人を場所請負人、場所経営の拠点となり施設を運上屋というのですが、この運上屋の跡というのが利尻島にあります。利尻島の北部に本泊という小さな集落に運上屋が建っていたというところがあるのです。これは近蝦夷の絵図を見ると、本泊を中心に利尻島全体が描かれている絵図があり、その中に書かれているのです。しかし、リイシリ場所が、いつ頃から設立されたのかということは分かっていません。リイシリ場所について書かれた文献がないので、全く分かっていないのです。

いずれにしても、この辺の記録はなかなかわかりませんが、文献の中に「テシホ場所慶長年中、ソウヤ貞享年中」と書かれているので、テシオ場所は慶長年間に、ソウヤ場所は貞享年間に開かれたと思われる。しかし、ここにはリイシリ場所のことは一切書いていないのです。そのため、リイシリ場所がいつ頃にできたのか、最初はソウヤ場所の中にリイシリ場所が含まれていたのかどうか、含まれていたとしたらいつ頃独立してリイシリ場所になったのかということも全く分からないのです。これまで調べられている記録、文献調査の中では分からないのですが、これからいろいろな調査が進む中で、そういう資料に出会う可能性も考えられます。

リイシリ場所についていろいろな形で調べていくと、1739年頃にはリイシリ場所は松前藩家老松前内記が1ヵ年100両を上納するお預かり場所として経営していたという記録が出てきます。元文4(1739)年の成立したと思われる『蝦夷商賣聞書』という本です。この中に利尻島の産物について「利尻ト申島テシオ〔より〕十五里沖、串貝八名物沢山、煎海獺、棒鱈ト申干鱈之名物諸々島珍物ナル積、」と書かれています。この後、場所請負制の展開の人たちの名前も出てくるのですが、この文献ではじめて利尻島の産物が記録されています。串貝は、いろいろな記録を調べるとアワビを干して串に刺して商品化したものことで、煎海獺はナマコを干したもののことです。この他、鱈が出てくるのですが、ここで鱈と昆布が出てこないのはなぜかと私は疑問に思いました。そこで、またいろいろな文献から利尻島の産物を調べたのですが、その中からおもしろい記録を見つけました。

それは、元禄9(1696)年5月、朝鮮王朝の下級官吏

の李志恒という人たちが8人が泰山に漂着したのですが、この時に漂流した李志恒が書いた『漂舟録』という記録です。この『漂舟録』には、漂着した泰山のこと、その後行った宗谷のことが詳細に書かれています。これを読むと、当時のアイヌの人たちの様子が極めて具体的に見えてきます。

泰山というのは、高い山という意味なのですが、日本語の記録、北海道史、あるいは日本史を見ても、元禄9(1696)年に8人の朝鮮人が利尻島に漂着したとは書かれていません。では、なぜこれが礼文島かという、松前藩の記録、あるいは対馬藩の記録を引用しているのですが、そこには、朝鮮の人たちは礼文島に漂着して、松前、江戸を経て、対馬に渡り、そこから朝鮮に戻ったという記録が残っているのです。そして、その引用した記録の年表にだけなのですが、李志恒ら8人が漂着したのは礼文島と書かれているのです。また、利尻島と礼文島を比較した場合利尻岳が標高1,721メートル、礼文岳が標高490メートルなので、泰山は間違いなく利尻だと思えます。

『漂舟録』に書かれている、漂着した泰山とそこで出会った人たちの様子を見ていくと「12日目。午後2時ころ、前方に泰山のようなものが初めて見えたが、上が白く下が黒かった。それはまだ微かに見えるだけであったが、船中の人々はみな喜んだ。少しずつ近づいていき詳しく見ると、山が青い天にそびえ立ち、山の上に積もった雪が白く見えた。」これは間違いなく利尻だと思わせる書き方をしています。そして、「朝。陸地より眺めてみると、山が中央にそびえ立ち、山の中腹から上には雪がいっぱい覆ってあり、それより下では草木がうっそうと生い茂っていた。人の住むところはなく、ただ山すそのところに臨時につくられた20余軒の草家が見えるだけだった。行ってその家を見ると、家の中に無数の魚が懸けられており、それらの魚はほとんど鱈と鱧で、ほかに雑魚もあった。名も知らぬ人が干魚を作ろうとたくさん魚を懸けたものだった。」とあります。

ここで私が注目したのは、泰山の記録の書き方です。これは間違いなく利尻岳のイメージです。ここに書かれている山の景観と、この漂着した5月と同じ時期に撮影した写真を比べるとよく分かります。この『漂舟録』をきちんと現地調査をして漂着した場所を特定できると、日本史の書きかえにもなることなのです。それを考えていろいろ調べているのですが、なかなか『漂舟録』から、利尻島のどの辺に漂着したのか、その後どのように宗谷に行ったのかということが読み取れない部分があって苦労しているところです。

しかし、この中に鱈と鱧が懸けられていると書かれています。5月なので、もちろん鱈も鱧も干し魚として見られる時期です。この1696年の記録に鱈が出てくるということは、何らかの形で松前藩の和人と利尻島のアイヌの人たちが交易を行っていたと思えます。先ほどお話し

た 18 世紀の『蝦夷商賣聞書』の中に鯨が出てこないのが疑問だったのですが、ある意味でこの 1696 年の『漂舟録』に鯨が出てくるということは、鯨も重要な交易物として利尻島の貴重な海産物だったのではないかということが分かります。

「臨時につくられた 20 余軒の草家」に「無数の魚が懸けられ」とありますが、ここから、臨時の家とは漁業の仮小屋のことで、無数の魚が懸けられているのは、夏に商船が来るまでの間、魚を干して乾燥させて保存していたのではないかということが見えてくるのではないかと思います。

それから「翌日の朝。海岸へあがって煙の出ているところをたよりに人家を探してみたところ、西の方 10 里ほどのところに、しかとは見えないが曲がり角をまがったところに煙がかなり立ち上がっていたので、人家からの飯を炊く煙気のように見えた。ただちに小舟に乗り移って進みながら、はるかに眺めてみると、たしかに 7~8 軒の人家があり、わがくにの塩を作る人々の塩作り場と大変よく似ていた。そこは魚を獲る倭人漁師の穴蔵であろうと考えた。」とあります。この時に書かれている 10 里というのは、日本の里数では 10 分の 1 になるので 1 里と考えてください。ここで「塩作り場とよく似た」とあるので、なだらかな坂道のような傾斜のある場所だと思のですが、それがどこかということはまだ特定できていません。しかし、この後で、泰山で初めて人と出会ったその記録が詳細に書かれています。「5~6 人の人々が舟着き場から出てきたが、その容貌を見ると、みな黄色い衣を着て、黒い髪に長いひげ、そして顔も黒っぽく見えた。我々はみな驚いて、舟を停めて進まなかった。私は船員に命じて（その人たちを）呼んでくるような仕草をさせた。しかし（双方とも）黙ったままお互いに眺めあっているだけだった。彼らの側からしても今までに見たことのない人々を見ているので、このように黙っているのではなからうか。彼らの様子を子細に調べてみると、実のところ倭人ではなく、結局どのような人たちなのか知りようがなかった。我々は殺されるのではないかと恐れ、ますます怖気付いた。彼らのうち年をとった何人かの人々は体に黒い毛皮をまとっていた。ちっぽけな舟に乗って近くに寄り、話し掛けてみたが、（彼らの話すことばは）和語とは似つかないものだった。お互いに一言も意思疎通ができないまま、ただ黙ったままお互いに眺めあうばかりだった。」とあります。そして、「彼らのもっている道具を調べてみたところ、とくに槍や剣だとかの鋭利な刀などはなく、ただ小さい刀をひとつ帯びているだけだった。彼らの家は塩幕（塩をつくる幕屋）のようで、隠密なところのようではなかった。彼らが貯蔵しているのは干魚、漬けて発酵させた河豚油皮の・・・」これが不思議なのですが「河豚」と書くところが。果たして利尻島でフグが見られるかどうかという疑問があります。「海豚」と書くといルカなので、「海豚」ではな

いかと思うのですが、イルカの油皮で衣服を作れるかとなると微妙なところで非常に悩むところです。いずれにしても「河豚油皮の衣服などに過ぎなかった。そのほか道具として、鎌、斧、それに半把ほどの大きさの木弓、鹿の角で作った鎌をつけた一尺ほどの長さの木の弓などだけだった。彼らが剛直な性格の人々なのか、優しい性格の人々なのかを試み見たところ、容貌は凶悪に見えるのだが、本来人を害するような類の人々ではなかった。」と詳細に書かれています。それから「彼らの家の前には、棹台がいくつもつくられていて、そこに魚がまるで林のように懸けられていた。鯨の干肉も山のように積まれていた。彼らはもともと文字でお互いの意志を伝える習慣がなく、（我々との間で）お互いに話を通じさせることができなかつたために、口と腹を指して空腹のどが渴いたということを仕草で伝えようと試みた。するとただちいさな器に盛った魚の汁を一碗くだけで、飯をくれようとはしなかった。」と続いています。「魚がまるで林のように懸けられていた。鯨の干肉も山のように積まれていた。」ということの背景に交易があるということが見えてくるということが言えます。それから「日が暮れると、彼らはまた魚汁一碗と鯨の干肉何切れかをくれただけで、飯を炊く素振りもなかった。」というのです。この部分から、よく穀物を食べる人たちばかりだと思っていたけれども、穀物を食べることのない人たちもいるということが朝鮮の人たちの記録の中に載せられています。

次に利尻海岸から移動するところで「朝。ほかのところへ移動しようとしたが、行く方向を定めることができなかつた。私はある丘のうえに登って、はるか四方を眺めてみたところ、陸地が東北側にはっきり見えた。（中略）小さな海をひとつ越えて船をつけたのだが、そこにもやはり同じような人たちが住んでいた。（中略）順風のり 30 余里移動してゆき、あるところに船をつけたが、そこもやはり同様だった。（中略）山すそのちょっと高くなったところへ登り、四方を眺めまわしたところ、東南間に長い陸地があり、山が蒼空にそびえ立っていた。そこは大きな陸地のように見えた。（中略）距離を見積もってみたところ、わずか 30 里ほどにしかならなかつた。風に乗って渡ってみたが、終日に及んでも船をつけることはできなかつた。海の遠近の推量は陸地でのそれとは異なつた。そこへ船をつけてみると、やはりこれまでに見た人たちと同様で、この人たちのことばを理解する方途がなく、ただ魚だけを食べた。（中略）そのままそこに留まった。地名を尋ねたが、小有我〔ソウア〕だと言った。」と書かれています。宗谷に渡る前の小さな海のところ、東北側に陸地が見えて、東南側に長い陸地見えるという場所が利尻島のどこなのかということも微妙なところです。というのは、松前藩や対馬藩の記録では、礼文島から利尻島に渡って、それから宗谷に行ったということが書かれているのですが、この記録では泰山から真っすぐ宗谷に行ったということが考えられるのです。

この『漂舟録』より古い文献には、商場知行制とか場所請負制という中で利尻島は出てくるのですが、そこにいる人たちの様子まで書いたものはありませんでした。いずれにしてもこの1696年の『漂舟録』は貴重な記録です。今回は、現在、名古屋大学にいらっしゃる池内先生が和訳したもので、「鳥取大学教養部紀要」から利尻の部分引用してお話していますが、宗谷のこともいろいろ書かれています。これを見ていくと非常におもしろい記録が見えてきますので、興味、関心のある方は入手して読んでいただければと思います。

簡単にまとめてみると、泰山が利尻山であることは間違いないだろうということが言えます。そして、泰山ではじめに出会ったアイヌの人たちは、7、8軒の家に住んでいて、木の皮で編んだ黄色い布地の長い服、あるいは、熊の皮、キツネの皮、貂の皮でつくった衣服を着ていて、持っている主な道具は、大きなものではなくて小さな木の弓、鹿の角でつくった鏃の先に毒をつけた一尺ほどの長さの木の弓であった。食べ物、家の前にたくさんの魚がかけられていて、山のように積まれたクジラの干し肉があったということです。容貌は、巾着の中に収められている長い髭とあります。これは間違いなくアイヌの人たちのことを書いているのだと思います。

「鯨の干し肉が山のように積まれていた」という記述がありますが、古代から利尻島にはクジラが歴史のキーワードとして出てきます。北海道には5世紀から10世紀ぐらいにオホーツク文化と呼ばれる時代があるのですが、利尻島にもそのオホーツク文化の遺物が残されています。それはトナカイの角に彫られたクジラやクマの像です。クマが1頭でクジラが20頭近くあります。これは北海道の文化財に指定されていて、これが出たことによって利尻博物館を作ろうという動きが出てきました。

トナカイもクマも利尻島にはいなかったと考えられるので、サハリンから持ち込まれたという可能性も考えられるのですが、このようなものが残されているということは、動物の魂を送り出す儀式が利尻島で行われていたのではないかとことが言えます。陸の動物のトップをクマ、海の動物のトップをクジラにして、その魂を送り出すことによって、また我々のところにやってきて欲しいという、いわゆる動物崇拜、アミムズミ信仰のための道具として使われていたのではないかとことが言えます。このクジラの像を鯨類研究所の人に見てもらったらセミクジラだということです。セミクジラというのは、銃で射止めても急な速さで沈んでいくということはなく、ゆっくりと死んでいくそうです。そのため、近代の捕鯨道具を持っていなかった人たちにとっては捕獲しやすいクジラだということが分っています。古代においてセミクジラが利尻島周辺を回遊していたかどうかということは、なかなか分からないことなのでこれから考えなければならぬことです。

もう一つ、フンペという地名、フンペとはクジラと

いう意味のアイヌ語なのですが、利尻島と礼文島が最短距離で向かい合っているところにフンペという地名が残っています。利尻島の方にはポロフンペという地名が残っています。ポロは大きいという意味です。礼文島の方にフンペという地名は残っていないのですが、利尻島と礼文島の間が最も狭まっているところにフンペという地名が残っているということは、ここをかなりのクジラが通っていたのではないかとことが分かってきます。また、地名として残っているということは、アイヌの人たちが貴重なクジラを捕獲する場所、あるいは、何らかの形でアイヌの人たちにとって非常に大きな意味を持っていたのではないのでしょうか。

クジラの干し肉が山のように積まれていたということは、何らかの形でクジラを捕獲していたということが言えます。まだ私の調査が行き届いていないところなのですが、17世紀前後においてクジラの干し肉が日本の中にどう出回っていたのか調べていきたいと思いません。

李志恒の『漂舟録』によると、釜山を出てヨンへの港に行き、そこでさらに北に向った時に嵐に遭って日本列島に沿うように漂流したということです。たぶん、対馬海流に乗って漂流して最終的に泰山にたどり着いたのではないかと、その泰山というのは、書かれている様子から間違いなく利尻山であるということが言えるのではないかと思います。こうしたことを具体的にきちんと証明することができれば、日本史の書きかえ、北海道史の書きかえを利尻から出来るのではないかとことを考えています。

次は利尻島の産物について、近世の文献記録からまとめてみます。『漂舟録』を見ると、鱈、鯨、漬けて発酵させた河豚、鯨の干し肉、雑魚というものが書かれています。『蝦夷商賈聞書』には、干し貝、煎海鼠、棒鱈です。ここに鯨は出ていません。また、両方に昆布も出てきませんが、『漂舟録』は5月の記録なので、天然の昆布が採れる時期だったからではないかと考えられます。現在、昆布を採るのが8月だということを考えると、昆布を採る時期ではなかったため昆布の記録が出てこないのではないかと思います。

昆布が記録に出てくるのは18世紀末、1781年から1789年の『北藩風土記』とか『松前随商録』からです。このあたりから鯨、鮑の干し貝、白干鮑、干鱈、棒鱈、煎海鼠、干鮭、鱈、魚油、鯨、昆布というような、現在の利尻島の産物のイメージと合うものが出てきます。

文献の調査を進めていくと産物の中心になるのは鯨、鱈、昆布、いりこです。現在では鯨は全く獲れなくなって、鱈も礼文島西海岸で獲れるだけになっているのですが、こうした産物が本州にどのような形で関わっていたのかを調べるのが大事になってくるのではないかと思います。

城下交易から始めて、商場地行制、場所請負制とい

う展開の中で、当時のアイヌの人たちはどのように関わっていたのか調べてみると、最も古い記録、1670年、寛文10年のものですが、ここでは300人ほどのアイヌの人たちが利尻島にいたとあるのですが、それ以降は30人ほどしかいないという記録が続くのです。約1割の人しかいなくなったというのです。しかし、30人しかいない中で、利尻島の豊富な海産物、冬に鱈、春に鱧、また、昆布や煎海鼠などたくさん海産物が獲れます。300人のアイヌの人たちがいたら、たくさん海産物を獲って商品化することが可能だと思いますが、30人のアイヌの人たちでそれが可能だったのかという疑問があります。

この辺のことに、松浦武四郎が記録しています。そこには漁期になるとオホーツク沿岸からアイヌの人たちが連れてきているとあるのです。やはり30人のアイヌの人たちだけで海産物を生産するのは困難なので、アイヌの人たちを労働力として位置づけ、オホーツク沿岸からアイヌの人たちを連れてきたのだと思います。

次に、利尻島情報を探るためにいろいろな絵図を見つめます。1807年に近藤重蔵が作った絵図を見ると本泊に運上屋があったのですが、その周辺に蝦夷の家と書かれています。これを見るとアイヌの人たちは集められて住んでいたということが分ります。また、1808年に会津藩は利尻島警固、宗谷警固に来た時に書かれた利尻島の絵図では、本泊と杓形と西海岸の3カ所に蝦夷の家と書かれています。この他にアイヌの人たちの家が書かれている記録は見つかっていません。この時代には、アイヌの人たちは労働力として住む場所も和人に決められ、自由に住む場所を決めることができなかったということが絵図の中から見えてきます。

1857年に秋田藩勘定方が書いた利尻島の絵図を見ると、道路や建物も全部書かれているのですが、この絵図から漁場が北から東、南にかけていち早く広がっていたということが分ります。

いずれにしても、近世のアイヌの人たちの歴史を日本語で書き残されている日本側の記録から見ると、松前城下交易の時にはアイヌの人たちが松前に行って和人と交易をしていました。これはアイヌの人たちが自主的に、主体的に和人との交易をしていたということです。この時は交易を必要としなければ松前に行かなければよかったです。もちろん、交易で何かを得られるから松前に行ったということは考えられますが、どれだけのものをどう持っていくかということはアイヌの人たち自身が決めるものであったと思います。ここには、ある意味で交易の中に主体性があったと考えてもいいと思います。それが、商場知行制として、例えば利尻に和人が来て交易をするようになり、主体性が失われていったという可能性が考えられるのではないかと、アイヌの人たちは労働力として位置づけられるしかない時代になったと言えるの

ではないかと思えます。

今度は利尻島の伝説について見ていきたいと思えます。まず、利尻島漂着伝説です。これは北海道の中央部にあった山が大津波でもぎとられ、それが石狩川を沿って北の方に流されて行って海に出て、ついには利尻島になってしまったという伝説です。これは更科源蔵さん、渡辺茂さんが書いた『北海道の伝説』という中に出ているのですが、出典文献が書かれていません。たぶんアイヌの人たちが伝えてきた伝説だと思のですが、文献記録があるのか、それとも聞き取り調査によるものなのかという出典が明らかにされていないのです。ここでは河野本道さんの資料から出てきたということが書いてありますが、河野本道さんがこれをどこで入手したのかということが書かれていないのです。

近世の記録では松浦武四郎の『西蝦夷日誌』に、天塩に長さ20丁余り、巾7丁、深さは分らないという沼があり、土人が言うには、この沼からリイシリ山は一夜にして抜け出したということが書かれています。そして、その沼には霊ありて土人の人たちはこの沼を崇信すると書かれています。

また、同じく松浦武四郎の記録の中に、サラキシ沼があると書かれています。このサラキシ沼について『新編天塩町史』では、現在では埋め立てられて全く見えなくなっていると書かれていますが、大正時代に書かれた記録に、この沼から利尻山が一夜にして抜け出たという伝説が残っているとアイヌの人たちも語っているとあります。

もう一つ、松浦武四郎の記録の中に、稚内の記述で、エナヲトウゲに至るや神沼があって、リイシリの島はこれより抜け出たという伝説がある。土人、アイヌの人たちは、エナヲを指して通ること書いています。また、カモエトウという沼があって、これは利尻山の山霊の神水と申し伝うなりとも書いています。この沼は稚内市の坂の下というところであって、現在「龍神沼」と呼ばれていて、現在の人も龍神様がいるということで崇拝している沼です。

今度は『武四郎廻浦日記』に書かれている樺太にあるトツソという山と利尻山の伝説です。土人はこのトツソ山にリイシリの女神が住むと言っていると書いているのです。トツソ山は樺太の東海岸にある山で、ここから利尻山が見えないということは分っています。見えないはずのトツソ山が女山で利尻山が男山だという伝説が残っているということは、何らかの形でつながりがあったということです。このことから、樺太のアイヌの人たちと利尻のアイヌの人たち、あるいは、宗谷のアイヌの人たちとは本当に密接につながっていたということが言えるのではないかと思えます。

また、これと同じように、樺太にあるトウキタイウツシリという山が女山で利尻山が男山だという伝説もあります。これは松田伝十郎という人が書いた『北夷談』に

書かれています。このトウキタイウツシリのスケッチを見ると、先の尖った険しさ、厳しさのある描かれ方をしている、利尻山と比べるとむしろこちらの方が男山ではないかと思うのですが、文献にはトウキタイウツシリが女山で利尻山が男山だという記録が出てきます。

利尻山の標高の 1,721 メートルですが、樺太のトツソという山とトウキタイウツシリという山の標高はどれ位なのかと思い、樺太連盟に行き行って調べてきました。記録が少なく、トツソが 580 メートルだということは分ったのですが、トウキタイウツシリの方は分かりませんでした。いずれにしても両方とも利尻山より低い山です。このトウキタイウツシリは、通称、古い時代にはメノコ山、その後、三つの峰があることから三峰山と呼ばれています。

利尻山が抜け出た跡だといわれる沼からは利尻山がきれいに見えることは分っています。しかし、樺太のトツソという山と三峰山は利尻山が見えないところにあります。北海道北部で 1,721 メートルの高さを持つ利尻山は目立つので、目印になっています。樺太のトツソという山も登山客にも人気があって、いろいろな人がそこに行くということは、それだけ山の印象があるということだと思います。この三つの山に伝説が残されているということは、やはりアイヌの人たちの動きと何らかの形で繋がりがあのではないかということが言えます。樺太のトツソと三峰山の形が利尻山に似ているから伝説が生まれたと考えてもいいのではないかと思うのですが、樺太にある他の山の形が分らないので、樺太の山の写真を集めてみようと思っています。

それから、利尻山の登山伝説です。アイヌの人たちは利尻山に登ると何らかの形で祟りがあると考え普通は利尻山に登ることはしませんでした。しかし、『松前随商録』にはなぜかアイヌの人たちが登ったと書かれています。ただ、登ったけれどいろいろなものが出てきて、すぐに引き返したということが書かれています。この他、最上徳内や間宮林蔵が来て登ったという記録もあるのですが、この時もアイヌの人たちは賛成しなかったということが書かれています。

いずれにしても、1,721 メートルの利尻山は北の海を行き来する人たちの目印、ランドマークになっていた可能性は高いと思います。また、利尻島で産出される良好な海産物を通じて、アイヌの人たちと和人の交易や、中国からのものの動きに利尻のアイヌの人たちが深く関わってきたということが言えると思います。そして、それはいろいろな歴史が刻まれているということが分ります。

そうした視点で、利尻島から日本史とか世界史、北海道史に関わるものがたくさん見えてきます。利尻は利尻という小さな視点で見るのではなく、そこからいろいろな歴史を調べていくと、どうしても世界に繋が

っていくものがあると思います。そうした中でアイヌの人たちの歴史、文化についてもいろいろな形で見えてくるものがあると思います。

利尻山が、北の海の道で目印になっていたということがどういうことかということ、71 キロメートル離れている焼尻島からもはっきりと見えるのです。先ほどお話ししたラナルド・マクドナルドというアメリカ人もはじめは焼尻島に上陸したのですが、そこで誰にも出会わなかったため、さらに北の島を目指したとあります。焼尻島からだ北海道本島の方が近いにも関わらず、マクドナルドは焼尻島から利尻島に渡ったということは、利尻島が見えていたということと、日本の鎖国が厳しい状況にあるということをよく知っていたということと、利尻島に近づいた時に、いかにも漂流していたというように装って島に入ったという記録からも見えてくることです。また、利尻山はサハリンからも見えます。利尻島から 120 キロメートル離れているところに、間宮林蔵たちがよく渡ったシラヌシというところがあるのですが、そこからもきれいに山が見えることが分っています。

利尻山を目指して北の海の道を通っていくと、どのように宗谷海峡を渡るのか、サハリンへ行くのか、あるいは南下していけばいいのかということが見えてくるのです。天気や気象、地理的な位置づけを見抜く上で利尻山は貴重なランドマークであったということが言えると思います。海の上にそびえたつリイシリは大きな目印になったということで、いろいろな歴史が刻まれています。

最後になりますが、18 世紀に入りといろいろなものが変化していく中において、蝦夷地のアイヌの人たちが日本の社会の中に組み込んでしまったということははっきりしていると思います。こういう歴史を見ながら、我々はこれからどのように時代を作っていくのか、社会をつくっていくのかということ、これまでの歴史の中から学んで考えていかなければならないと思います。

皆さんも利尻島にいらして、いろいろな形で利尻島を歩いて調べていただければと思います。

以上で私の話は終わらせていただきます。

どうもありがとうございました。(拍手)